

特別講演 2

「序説＝市民が求める臨床医の姿

副題：予防と早期発見は医者金のメダル」

モリーオ株式会社 代表取締役
岩手医科大学 第二内科 前教授
平盛 勝彦 先生

1) 断片化されている病者

現在、正当な医療行為の診療レベルは十分に高い。しかし高いのは専門とする「病氣」の診療に限る。「病者」を診る「臨床医」としてのレベルは不十分である。糖尿病専門医が診る病者の多くが心臓発作を起こしてしまってから心臓専門医の下へ搬送されている。その時まで、病者の心臓を診る医者はいない。

2) 病者予備軍である市民を診る医者は皆無に等しい

病者の来院を待っている医者の眼中に市民はない。市民は医者を目下の自分とは係わりのない人種とみている。本来、医者は病者を数多く診るほどに病者の少なからんことを願い、市民は暮らしに励むほどに健やかさを望むものである。いまは、その肝心の願望が惑乱のさなかにある。ボタンの掛け違い、寅さんとマドンナである。それが、予防と早期発見を医者に期待しない公的医療保険システムを形成し、医者を専門の病気を診るだけの人種にしている。

3) 本来の臨床が疎かにされている

近代以後の西欧でサイエンスが医療の柱のひとつとなった。性急にその西欧を追尾した明治時代の後遺症が今もある。医学界権威者らの、頑迷で一方的なサイエンス好み、明治以後 100 年を越えた今に累を及ぼしている。臨床に根ざし臨床が大事とする EBM や NBM を今になって欧米から輸入する破目に陥っている。医者は病

者の友であるだけでなく、古来、臨床（広義）を行う者の代表であり、リーダーであり、そのノウハウに長けた地域社会の「先生」であった。

4) 市民が求める臨床医の姿

いま、本来の医者として、市民のために医者が起こすべき行動はいろいろある。手始めに、各分野専門医が専門性の壁を越えて協働し、病者を診て、病者予備軍を診て、予防と早期発見の努力を、覚悟を決めて、勇気を出して、誠心誠意行えば、マドンナたる市民から愛され、落ちつつある社会的ステータスの回復を望めるであろう。